

目的・目標	● 大学と教育委員会が連携し、現職教員を対象にコアカリキュラムを踏まえた特別支援学校教諭一種・二種免許法認定講習を実施し、コアカリキュラムに示されている到達目標に関わる受講者の満足度、理解度、習熟度等を調査する。また、オンラインと対面の講習形態による違いを比較検討し、両形態の利点と改善点を明らかにすることを目的とする。 ● オンラインと対面講習による利点や改善点の比較検討を通じて、地方に立地する大学の特色を活かし、研修参加が困難な地域（県内、または近隣県の離島、山村などのへき地）において遠隔による教員研修の実施モデルの提案を目標とする。
-------	---

取組概要

・**1年次**(令和5年度)は[オンライン](#)による免許法認定講習を実施した。受講者は新潟県、富山県、石川県の現職教員等であった。

・第2欄の「視覚障害者(心理等)」「聴覚障害者(教育課程等)」「知的障害者、肢体不自由者、病弱者(いずれも心理等及び教育課程等)」、第3欄の「重複・LD等」の6科目(定員各40名)を実施した。

・講習実施後、受講者全員を対象に、Googleフォームを用いて「満足度・理解度」及び「習熟度」についてアンケート調査を実施した。

・アンケート調査結果について、一例として、知的障害教育課程・指導法の「満足度・理解度」については、「集中しやすかった」「講義資料は見やすかった」「講師の声は聞きやすかった」「学習目標を意識しやすかった」「グループワークがしやすかった」「講義内容を実践で応用するイメージができた」の6項目いずれも5件法で「とてもそう思う」と「そう思う」の回答のみであり、受講者の講習に対する満足度・理解度は高いと考えられた。また、コアカリキュラムの到達目標に関連する「習熟度」の10項目については、「知的障害教育における教科の目標や内容、全体構造や各段階のつながりについて理解できた」「知的障害の状態や特性、学習面や行動面の課題を踏まえた教育課程編成について理解できた」等こちらも5件法で「とてもそう思う」と「そう思う」の回答が多かったが、「知的障害の状態や特性等を踏まえた自立活動の指導について理解できた」等については、「どちらでもない」「あまり思わない」もわずかながらみられ、講習内容が到達目標10項目を網羅するものになっていなかった可能性が示唆された。これらの傾向は、他の科目にも共通する大きな傾向として見られた。

・**2年次**(令和6年度)は[対面](#)による認定講習を実施した。受講者はおもに新潟県の現職教員等であった。

・第1欄の「特別支援教育原論」、第2欄の「視覚障害教育課程・指導法」「聴覚障害心理・生理学論」「肢体不自由と病弱の心理・生理学論及び教育課程・指導法」、第3欄の「重複・LD等(発達障害及び重複障害教育課程・指導法)」の6科目(定員各40名)を実施した。

・1年次同様講習実施後、受講者全員を対象に、Googleフォームを用いて「満足度・理解度」及び「習熟度」についてアンケート調査を実施した。

・アンケート調査結果について、一例として、肢体不自由心理・生理学論及び教育課程・指導法の「満足度・理解度」については、「集中しやすかった」「講義資料は見やすかった」「講師の声は聞きやすかった」「学習目標を意識しやすかった」「グループワークがしやすかった」「講義内容を実践で応用するイメージができた」の6項目いずれも5件法で「とてもそう思う」と「そう思う」の回答のみであり、受講者の講習に対する満足度・理解度は高いと考えられた。また、コアカリキュラムの到達目標に関連する「習熟度」の12項目については、「肢体不自由の起因疾患となる病理面と心理面及び生理面の特徴及びそれらの相互作用について理解できた」「観察や検査を通して脳性まひ児一人一人の肢体不自由の状態や感覚機能の発達、知能の発達及び認知の特性を把握することを理解できた」「家庭や医療機関との連携の重要性について理解できた」等すべての項目で回答が「とてもそう思う」と「そう思う」となっていたことから、講習内容が概ね到達目標を網羅するものになっていたと推察された。他の科目の講習を含めた全体では、若干「どちらでもない」や「あまり思わない」との回答も見られたが、概ね理解できたと回答する傾向が認められた。他の科目では、若干「どちらでもない」「あまりそう思わない」との回答も見られたが、概ね理解できたと回答する傾向が認められた。

本事業の成果	令和5年度(1年次)では、<u>オンライン形式</u>により計6科目を実施した。事後アンケート調査の結果から、受講者の講習に対する満足度・理解度が概ね高かった一方で、コアカリキュラムの到達目標に関連する習熟度については達成不十分であることが分かった。不十分の原因として、2日間8コマの講習という時間的制約があることや、オンラインの接続不良等が要因と考えられた。広範なコアカリキュラムの到達目標習熟のために、オンラインの不備を回避しつつ、受講者にとって理解しやすい説明の方法や教材の工夫、受講者が受講後に主体的に発展学習に取り組めるための関連資料・参考文献の積極的な紹介の必要性が示唆された。 令和6年度(2年次)では、<u>対面形式</u>により計6科目を実施した。事後アンケート調査の結果から、講習により多少のばらつきがあったものの1年次同様受講者の講習に対する満足度・理解度は概ね高かった。習熟度の達成について、こちらも科目によってばらつきがあるが、対面講習ではオンライン講習と比較して「とてもそう思う」の方が「そう思う」より割合が高いケースが多かった。講習担当者がそれぞれの目標を機能的に関連づけ、受講者にとって理解しやすい説明や教材の工夫をしたことに加えて、「満足度・理解度」の項で挙げたように、科目によってはディスカッションや演習等「グループワーク」がしやすいという対面講習ならではのメリットが生かされていたのではないかと推察された。
課題と今後の展望	令和7年度(3年次)では、1、2年次のオンライン形式及び対面形式で実施した講習の調査結果を具体的に分析し、コアカリキュラムに示されている全体目標・一般目標の具体である到達目標に対する受講者の理解度や習得度の向上、授業実践への活用に寄与する講習プログラムの内容や、オンラインと対面の講習形態の違いを踏まえたグループワークの導入等について具体的に検討し、それぞれの形態のメリットとデメリットを考慮した講習の在り方を客観的に想定していく。それにより、コアカリキュラムを網羅した特別支援学校や特別支援学級、通級指導教室等を担う教師の専門性の向上を目標とする大学での教職課程、また、現職教員等を対象とした免許法認定講習の内容・方法の充実方策と、研修参加が困難な地域(県内、または近隣県の離島、山村などのへき地)において遠隔による教員研修の実施モデルについて提案したいと考えている。